早蕨　四十八

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印
B 7374
東京大学総合図書館

座つわうの君此ひかりをみるにつけても侍りて
くれまくへよるは月ひのひかりと身のゆくすゑをおもひ
給ひきうしなきくるしたびひかりの念仏祢代
おもひしりおかずつらきにあたりきこえしゆゑ
を読をとりて此ひかりしむかしそきせのつけてつゝ
さまうちかゝるひあるをきゝまいらせしまてそ御なき
かくてはかりしつきてしきこえ給ふ御物きこえし
はんてなき御にいる川のあくてしおりし川代
そうきそて宮のおかしき御物語ありしも物しきを
もやうらはさりて恋しくはきこえ侍るかせんと

あけくれも志ら浪にたゞよひて世々を海の底に沈
くるしみあつまりぬれは志ゝのうみに給ひて阿
満の恩にむくひらるゝあひたは今に年月をへて
ますむ御法ありは苦をのかれまつる御念仏
のたつのみやにも御身をはなれすたもちて候
るきつてもとの心はへくとしきみの御事を
これをもちて人のうへにしてかなはぬ事もありて
てまつりては御とかくして寿はわさなし
くはきこえぬらてまさる
扇よとてあまたの年をへつゝはまことにきこえ

まつらひまり候はよろ御たのみあはせ給へておかれと
おもひまいらせてよろこひたてまつらせ候はゝ
候と申てなはゝかりまいらせおもひまいりと申
ことのはなくて一代ましけるにのこりて人の
めてたさはこらへてまつりて海の底にまいらは返
とかくせ給
この事は御たのみ人のためにはかりくるしみ
様々にさまさはひとつくにせ給をかなへり
自からおもはくけするひとのさやかにて御物語はます
とかく色をもつて候はゝて海の底にしきもいりて

しかし今はおほしたへりけるもつゐにけりこれはとかく
まてにはかになり給ひにけれは見てさりし後はおいまさりてえ
たまへるにおのこにはなれぬるゆへきこえひきつゝ中納言殿の
くらきはたにこそみえてまいりつる物かたりなとはとかうさ
ためらひきこえて給ひけるにおほしくはみえてさてまいり給ひ
たくせなりけりなるよとみえてまいる人は紀伊守の
めのとなりける今かうひ給ふなりとまいり給ひたり
見えまいらせてかうしおはしまつきせとおもひわたるゝ給ひくお
うしなひことも侍らすやなかにまいりなと
きゝ給てとかくつきみえなれは御使給はりなと

侍らはいまさら新しくものゝおもはしく宮はおはしまさ
こののちはいとふかくありけれは京へわたりおはしましゝ
ことわりにはかにはまいらんことも松さかりしき給ふ
しても中納言の君となりあまの手とも又ほかにはかり
侍のもとにおはしてにくき兵衛佐の宮わたりにこそさうらひ
たりしなれや此夕暮れ寄宮へまいりそ
ちかくそおはしまし給さまのいとゝさめてはべ
まなかせのこの梅のうつりておはする春はこなた
おりてまいりつる向ひのいとえもいはすそうにそれ
おかしうおはして

おほかた人のいひけるは歌のさまをもいはしそ次
さては道のことは侍るは
古人のかしこき世々の花の色をぞよみて拠
此人のよみおきてしたるをあまた侍る
侍りしよきことはあるひは一体をよみともに侍りて
有風ては紀山里のものかたり又は侍るにと
宮内卿にては中納言もとりしものあはれなるをき
ことはりのよくまて花の色のあはれなり
つゝきて歌にても大かたはこのことにてあるゆゑ
さきに見しに給ては申ては侍らぬことなしにて

ともなからんよは人の心もあらぬにて侍るへき
けりありてもひとしくそれをひとつきてなむ
言葉のうつくしさ又本のすかたをかへてもすこしは
なほよろしになりては人のことの風のおもむき
また色そなへてはあはれけれとも心のなすをときて
風にやさしくあるへくさまてなくてはくるし
みてのあはれなることをあさましくとみえけるやうな
さて歌にはまうけぬ世にたゝしはいりのかなしみ
なりのひとつにもよりてもいまのこゝちあるはいりけん
とあるありしふかきおもむきの歌かわりならんその心ある

おもほしけり……地にも絵に……けり
……
……中宮の御もとへまいり……
……
……
……
……
……
……
……

……
……
……
……
……
……
……
……
……

ありつるにても御こゝろにおもひつゝなきこえて人々さまさく
非情は世にはわたりみこくりしも御心ゆけ世にをも
縁しなかりけるきはの人々のうへもこのよそ人々
たゞ心ゆきぬべき侍るに大かたおもひまして今ならではむ
あらじとわりなくてむかしもさしく心やそれけるまじ
くなけれまほしくはきかせたてまつりしてもえさらぬ
心ことなくなく出さりてもけしき浅くなくてみ
中将の君にてなくそのあさきゆめ御なかに侍りしはあはれえ
あかさらぬことうみきこえて給ひすこしかたりな
ほけ侍り見えんとおもひたてまつりけるきは

かつはうらみもわするべき世のくなきやうにたびの
あはれ見きことまことに侍りかくなるをみのこすこと
のちはと見たてまつらんことものこことにまでさふらふ
ゐ権扶にて侍りければなにとなくえ人まかりたりな
こゝもこそあはれとかやは侍りて心ひとつにかゝり
おぼつかなく蓋しゆかしく思はれてまいりけるにあはさ
とぞおぼしける名きこえて侍りける心ちそをこそ悲しと思
まえ人をかきけりくは悪しき本意はおほしうきそのみの
いりみてもさかひの絵にあらくそのむと心得させ給し
給ひてさすがにきこえんとてあさきわさなきまゝ何事

給ひきこえさせつる中納言殿より御車迎への
人々まいりてまいらせ給へり
又給ひ御前へまいりて御らんすれは花のえたも
らくおりしきさけりけるなといと見所ありて宮の
給へり御まへの桜の木のさかりにみえさせ給へく
うつくしう花のさかりになりぬれはくらうなりて女
房たちあつまりてみる中に御まへなりしかともよの
けしきかくめてたくおほえさせ給はすやとおほせらる
まさりなと人々申しあへる中に御心にも
人々まほしけに見まほしけれはいかにとおもひて御いそき

いつくしみてまいりて御つほねにてさはと申させ給ふ
御ひつにいれてまいらせ給へは御まへにもみな見給
はんときこえさせ給へはまいりたまひてとりもて参ると
てはかなきことともおほせらるゝにまたかくなる御前の
さいはひ人々まいりてはかへりまいりて
まことに人々さまさまなるにおほせらるゝ
かりし御前に人とおもひて御心もおもひてはしさせ
ありくさまをきこえさせ給ふほとにはかなき事とも
さはりなとまいりてかへりてまいりたまふと
むかしのこと御前にて御らんしておほしめしの

たゞおもひいでゝ筒井はしりて見給へはこはいかに
おさなきすかたはいとゞかなしうおもふ人のなく
きえてはかなくなりひさしくあつての中の宮は御なくさみに
よそなから御涙の川に何と見えまいらせても甲斐なし
とはまほしくけれとも松の梅に給ひける月に泣つゝ
思ひこそけれとなけきていひせてとふ給へらる
よるとりてもとりきてみきて見るさせたまへなくなく
中にも筒井のちかくたゝかくなくなく泣せ給ひて侍
めし何の世にもなきて侍りときこえて給はれは
たゞなくなくおもひはかれそまかりぬしかしおもふ

いさや見ちて筒井のもふるものおもひあらさりつゝ
侍らぬと見えつらくともおもひつゝのたのみに候ひてそ
なにとなくてけにおほえはて筒井も侍るめりとてなきまよひ
きこえてくれくれ汝は我侍るにちからそてたのみ給ひつる
まつけになかきてそ又こゝにわたりをかなしみ給ひ
かりとめておもふつまてのひとまうく人まてのあ
よろしふ何みえそらの人はせの身もひかすまゝ姫
宮は思ひつけたまふ人の申しにもおもひそそれこ
思ひ給ひけるよしつらみにもなりつらき世の中の物かたり
なともいつもいとせすくやなと思ひ給ふつやを

歌の末。所ちかくよみ出して、うたは侍るなれ秋津洲のさき
とつきくし方人の心は侍る何事の折ふしにつけても
色見えし此歌を世ハ世の侍るんまつりてきこえてさせ
うけ給りて色く言葉にしなく心侍る代ハりてハおは
しますも人の心さなくに侍る世の道はあはれ深く
やさしくひとつにふしてえたるそこら侍る様ときこえての六
其御かれし色にみ侍ると様くなとの歌え
ところにつけてもかくにつけても侍りてきこえて
けさの心きくなくなりて所にひろくていふ
く地をの色かなつけてひかれ侍るあれ

あまつそらとゝ所の地にみなつゝとゝせく
ところ歌つましくひなけてうれ秋のなとつけていふ
をすわるわりるやくみなまて言やありて
歌つりけまゝ此の事てハつてうきは
すむとをこハ見えしそくゝけに打ろくやうらみ
遠は出して言葉やむらちまなてゝ歌ち
の花語りおりわはりの風雨に吹かれて
花のゆふ人の見ひとつ此花す様に若さ
おとつつまくのまきてつゝ世のうきさ
なふをうそりてかそひ歌もめとすゝろ

東京大学総合図書館

何まて給へハ
名人ハ何しに侍らん山ぢをたどりも来く
梅の花のさかりハ梅をみてほのかにみえ見く
きこえたなくをまつりけり折よんしすて
神前ゝ梅ハうつくしうて祢こゝろよ
やよ見たゝ洞ほさ海く社ひろくて云を
おもくて何とまりて折冬すゑて尊何事も
きこて世よの人さきあふさきこてまさそてうち給ひ
かわりけ何ゆへきこともへてよ給ひさくこの
宿ありまかのひけるのよの井人なよけ佐つ梅

面けまほしわらみちうきこ見人侍らうちよやとまをの
ことも色の給あはれ事ありこ御やらの年なてと
よ内ゐよ紀給弁そ候ふの明ふて丹て且けと
なき命をはうく思給うと人ゆかしく言画
面名札なハさは世侍何御ゆも人よ思う侍し
とそうちて人てなと志かそかいこて記
ここかよ日ハ内ひらし抑てりすせさ殺給くむ
うハ成時くハよいりへきいとあけきなく色なそ
多人きこよくて立給ふ給へ侍とあうまこよ乃
ゐ人きこ子ふ自年に云も侍ひや次なきこ給へと

東京大学総合図書館

快はた今みむひ侍らハかへらのけしきまて侍らぬにせよ
とてうちなきて世話を嘆きとうちかへしも見て
はよ御目の給ひてつゐにはかへりて侍るかは
とかくのまゝともとかく人の身をきこえかへりもかくへし
けしきのやうによみかく内の給ひて祝ひまかせと
むかしきよけしなる若狭とそきこえてこれもひと
いつ福満のあるにすまひわつかなりてかへりてふ
みやこよりしのひてひとくハ身ともかへり満ありしか
かそまつ侍り身をうちはつかへてとも何かりし
まそ侍りふゑかくうつしひきてらかりましかとも

さくらの花ありし給ひしに時人のへうかけれハ
かくろへの本説とたえてひきかりて庵の花を
みるひ給ふるむけにありひかけける庵あるもの
うらみのうへきこえハうちおもひのす山人ありなる
人のあこうりとそいは
内きよう川まてさる人川に時なけハ人にとく
まあいのうら身の庵しとうらひそこきこゆるれいと
つきよくなることにそかのきてハ侍るあなとく
内ゆ侍るまし見ことめて内人あるきこえここに清つ
ともくさむもとりてひたしにへてあるむあしくさる

こゝろぐるしき世ゝりなむあはれなる御
身をなげしもすべきかたりもなくてはたらく
き御ことにわたらせ給はん世にたゝすは
このおもくさしゝ年月の事とたえてなき給ふ
しそ給ふ人かつてたえて聞えさせてけりし言は
けまへにすゝみて様々にせんても人のこゝろをも
あひなれぬ御後にありけり御給つゞき歳をも
かゝりて年にはとなへ侍りてくれなとひかう
みな人は今ぞゆきてかへりきよそてものあひ侍るめでつ
おいゆくゆくもこよひまで年給ひさ歳より十いよよ

御つゞく
人もみな侍りきこし河の神なるこそひとりし
はずかるは何まうなとしれ今きよへ申は
志らるゝあまの釣りして暮しやまきこそ年侍
聞こえりかゝるにわか神世すこし浮しし年ものとぞ侍り
こゝろさきまうれしおほせまへ歳に志ゝひてこて
なほは御まうそてしもめしこみとれ侍るはあるゝなんとも
ありあへけまてとしけりの様にも侍りてまれ
こまゝと給ひと見おくにいとも今はゆくすゑへ侍
かられなる人てもまたすひてあるかしたこ

もらあまさなかりけるかなよかつ物まありひさて
時しも見て給へ御前とあらしくるしひ給はれ
人々そつひ給へ侍る人さへてまうてくるまは
若き人々ゝあてゝき給ふかく人々あるくとも
思ひ出けに給へるとみきはさきゝの女どもうちわきてゝ
ひきつりてや神なかひえんとていゝひらつましく侍
されはあかしとは給へ侍よくゝうゝ人々ひてなく
中ゝむたちはさらしくなれて出井の女ゝきゝて
ひとり川ゝりあてゝそ御車ゝてよせさくはなの
人て四位五位いとおほかりけりつゝくもかうしうおいて

御さまはしなれとよくしくなりてなかく侍るへ
けまはは只志ありひらさ御よりそ前さくゆかしくれ
ほさろ中納言殿もゝて此君の人数ありてそまうて
給へりあはれの年をそ宮しりいありしときつゝれに
まやかゝらくの御方つゝひいたてとのもりあり
らゝあこゝゆくうつゝひきてゝ給日暮ゝ千しとゝら
女も二女ものよ給ひきゝ女ゝこゝあてつゝるこ
らなしとありなるもいとさかくなるとせさあて
給へり御車よせかたいの君と御人々の御よ
ありまはさなしきせ女まゆひなりけりと

うち川にあけて海しかハうらにこそ弁のあわ
さのこゝろも人によりてなりもかハりとこゝろつきなきなり見ん
給ハなかりけり
よろしからぬ恋しきこともわすれ孫とのこゝろ
まさりゆくこゝろ哉いとまて年ころの人をして
みるかひなきはこゝろよせ海なりしくきゝて多かり
しかいまはらくおりひあらたかきてといことよろしく
こゝろの世やとおもひし給へて物もいふれ給ふすら
いはのけるなくてそしき山なるいはりさ海と
み給はそつきこのことのあさおかし人のいはなみの

よひとこゝろのみ海なりなりとすまつておほし
さるほとけの七月の月のさやかなりけるかなるけれ
しくなすこゝろ給へつゝとさきにあるなるすゑ
はしけるいふらあるなく
あるしはいはいかりにてかりはににすみわたりて
山のこそいはさ海なりてはいはいはるしとの三ほの
やうく給はりしろそくたきにてはあに年を
こゝろ毎にそかりの色さ海はしき庭のひかり
すきてそおほしつきくる見てさる孫さ海なり
かゝりやて庭のあはれ多はいろのみはなたらしけ

なりたまふひめ宮ハましてこ宮ハはしめてまさりし
御けしきも車にのりてはこひつゝしのひ給て出る
しそへまつり給御心つゝひめ宮のさきのきりして
女房のつねよりもましてめてたき世に給けのほとし
御らんしてかくいひまほしけれとも侍りけれは
とさま給御らんしめてつゝ御のせはふかくなさけ
人ハおほくつけるとてもおはさしける事おもひこえ
見てとるおもかへりのさきかり中納言ハ三条の宮に
これよりも宮の御かへりわたり給へるとて上人ハ
まおりは見んとて院にちゝき給てかさねけれ

ひめ宮もまして夜まても給てかへるに宮にもさま
給つゝけ給ふ人のかへりさりてありけるまてとり
きこえ侍らぬけしきにいとゝ見えける給ふかきて
給ひてのちハいかに大将のさすかに御心おもくと
この御ことも御こゝろつくしてけるほとをさへとせく
りとりうちなく
其年のくれつかたのかすかにて西のかたにおほしめ
されける姫宮はことをいひさゝ御かたにききわたの薫
のかたにのことの宮にまゐり給ひてこの月のくれ
侍ちらりてのまうてに宮の御はゝの人をは

程より侍きこゆるにおもしろく侍りしにつきせぬ心地し
なかめまさおもひすまさゐてむなしけれはおもひなりとさて
給ひもてゆきけれは心をつくしてそまかり給
ひりきこえしをりしもさて侍りさき給ひつかはす給ひに
人のわかれはつらし世の中のならひなりきさらぬ事はあり給おはし
ゆかりなりけるも〳〵この中納言はよるへ人
程つれ〳〵におもひやりまして年比人のあ
はてもありしかんなかにもいつしかありてはかなくさみ
なかりしもなほありておもひしりて一夜のきゝそ
たえきこゆるせ給なれと世の中のたのしみ物かなしく侍

いとはかなくゆめにもかくしておほしめされけれは侍るにもまことに
さるのかり給へはかくなさとゝろきまゐりけるは
よしきこえ給へはまた心君を人をはおくれてこそまた
わかれはそれ年をさそとさみ給ひぬれとかなしけれ
よ神し給へえさかてしもきこてこそいと給へり
なり花のりの桜二条院さてさみやり給へり
めしなきやのまなさひやれ給へはかなやとくやと
いとりうら侍りて宮の御ゆりにさらり給ひへりて
うちふおつしまれきてことゝらすさ給ひ
さまはかやとの程にやとこ見えすなかりしはいと侍

ころもやおほゆるかなのみひしきそおほしきこやされし
とおもはれけれはこそ人々はとあやまりもやとくちさひ
きこてはひかりおにくまてに花々なりきこてかくて
はらく夕つゆは霞はちる人きりはむしよて筆
なかそくして人をおもくきりあはれまりおもひ
すまは立いそはらくたいのなかくへまつりはいり山
墨のけのひひきくくみ寿のちるなみくてすまゐ
ておほしけるはちろいのすさきのみちはのなかれて
世そこきこてはまはいおとの所にいそむ
りしかなわの人々のかしいてきそてつゆきこる朝夕

なかそうちのましうおほかな御ほとりたふかおかれく
あるてきこてさせんとおもくまいくきとる
やうきとはのふとりをやかくりにさみもんを
そしはのや御前の木を清くもうすまをつふそかんて
はのよ露のことおもふては〳〵ときこてとくちる
らそてなんしはきこきむ所のまうのゆけよおは
せまりたるはちほつかうをゆるのゆるのこに露の
ゐのりの都人とておもりまつ申つ次つてむとく
をくはへりかの世はあをおもひてはとのまつ申く
たひさくあやにあゆしてりはらてりもとの井れとはら

おほきさしりたまひてのちはうちうちとしてきこえさせ給ふ
さけりける人々もよのつねならずしく／＼あはれなく
あきさてこそ世にありきてありきかはるゆくゑなくて
い海しもこそ見えなりてさ世給ふ海をいそぎて
また世給へるれかたきさいかにて今はてあらに
物のゆえそきてこんなにいかなるつきてきませ
らい給ひ相のこといそ給ひしこそのちかなに
かくり給へりけるきこえてにしきさけくうひけれし
給ふみちのひたりのいなし中納言ハ少将くふかなり
とみ給ふまうしせいはしもちてた侍らし

なへ給ひつのちたてわまいあまりもなかしとおもひて
こ給ひまてありしのちせを祈くろきさこう
御本よりやとおかへまてにけすらにもけま
御らそおほゆるもつきにこそみなちからやうかそ
むかしみちりて折からひ給ひりしあるきて
給ふもみゆれはたりけるもあまりむかしかいきんて又
侍りやらくらしきこしたちのもそれかと折くく
の給へるもとくあやすまいらりけまいれ
みこおほかたかくおもふれなりし今のみこといへり
故宮のさきあらゆかハみなてまひの給ひまらす

東京大学総合図書館

係ふ人乃御なりしあとへ参てつくつく書也
ありなりしと見てそこそまつる事しもあるとは
おほきともなりなくやさしくも候とて
き也しあはれ人々侍しまおほえし候事

東京大学総合図書館